

「味噌買橋」の由来

—その発案と歴史の系譜—

櫻井美紀

— 従来の研究にみる「味噌買橋」への疑問点 —

はじめに、「味噌買橋」を取り上げた従来の研究の主要なものを挙げておきたい。

a 「昔話覚書」

柳田國男の『昔話覚書』の中に「味噌買橋」の一文があるが、これは一九三九（昭和一四）年に『民間伝承』の四卷五号と七号に発表したものである。澤田博士の続飛驒採訪日誌の附録で、最近に集められた丹生川の昔話には、その味噌買橋というのが出て居るとして紹介されたのが、以後、日本国内にこの話が広範に知られるそもそもの発端であろうと思われる。

柳田は「その筋をわつといふ」と、次のように要約している。
むかし丹生川の澤上の長吉といふ夢で、早速出かけて来て

の味噌買橋に行けば好い事があるといふ夢で、橋の袂の袂の豆腐屋の親爺

が遣つて来てむうしたと尋ねる。長吉の答へを聴いて豆腐屋は大いに笑ひ、夢をまに受けんとはおろかなことだ。わしはこの間から乗鞍の麓の澤上の長吉の屋敷の杉の樹の下に、金銀が埋まつて居るといふ夢を見るけれども、夢だと思ふから氣にも止めないと謂つた。長吉はそれを聴いて、帰つて我家の杉の根をほつて忽ち大金持になつたといふ。

この粗筋の紹介に引き続き、柳田は G. L. Gomme の一話を挙げ問題提起をしていく。

G. L. Gomme の著、*Folklore as an Historical Science* の巻頭に掲げられた一話は、いの正直な炭焼を a pedlar (行人商人) に、豆腐屋をたゞの一市民に、高山の味噌買橋を London Bridge に取替へれば、九分九厘まで同じものである。(中略) 二者が斯ういつた形で結合したものは、いの味噌買橋の話が私たちには始めてである。

いの柳田の一文には、ヨーロッパの各地に伝わる橋の夢の類話ばかりでなく、アラビアンナイトの夢の交換の話を挙げ、「いの話の

種は小亞細亞から持ち込んだ」というヨハンネス・ボルテの説の引用がある。また柳田はこの文の「追記」に、『西讚岐昔話集』の橋の夢の類話に触れて「どこかに隠れてもとの種子はあつたのである。或は今にその出處もわかつて来ようも知れぬ」と書いた。

短いがこの小論文の影響は大きく、後の研究者たちも「味噌賣橋」については柳田の論考を起点にしている。

b 『日本昔話名彙』

一九四八（昭和二三）年刊行の柳田國男監修の同書には「財宝発見」の部に「味噌賣橋」が入っており、コメントは「ロンドン橋の話とまったく同じ」とつけられている。

c 『日本昔話集成』

閑敬吾は一九五三（昭和二八）年刊行の同書の第二部本格昔話Iの「致富」の部に「味噌賣橋」を入れ、その注にアルネ・トムソンの言を引き、「怪しきまでに一致する。我が分布を見れば最近に齎されたものではあるまい」とした（後に刊行した『日本昔話大成』の注も同文）。

d 『日本昔話通観』

稻田浩一・小沢俊夫責任編集の一九八八（昭和六三）年刊行の同書『一八卷、タイプインデックス』には八話が登録され、その注は「書承的・翻案的なきらいはあるが、日本の伝承風土のなかで培われてきている」とある。

e 「民話における夢」

これは一九八六（昭和六一）年、『夢と人間』⁽¹⁾に掲載された大林

太良氏の論文である。大林氏は「味噌賣橋」を取り上げ、「味噌賣橋」の類話は東アジアではなく、ヨーロッパに多いとして、ギリシャのマケドニアの例とスイスの橋の上の夢の交換の話を紹介している。そのあとに文から少し引用させていただく。

「味噌賣い橋」型は非常に不思議な分布状態であると言わざるを得ない。つまり、一方は日本において分布している。ところが日本における分布状態も非常に散発的である。そして日本の周りの朝鮮とか中国にはいまのところ例が報告されていない。それがヨーロッパに行くと南ヨーロッパから中部ヨーロッパにかけて、この形式の話がずっと分布していて、日本のものと非常によく似ている。

そこで考えられることは、これは何かの形で西洋人が持つてきただのではないかということである。ただ、それは一体どういうルートで持ってきたのか、それはよくわからない。一つの可能性としては、いわゆる南蛮人が戦国時代から江戸時代のはじめごろに持ってきたのかもしれない。しかし、そう解釈した場合の一つの問題点は、それならば南蛮人が活躍した九州あたりにも事例があつてよさうなものであるが、九州にはないことである。それから見ると、どうしてこういうような分布状態をなしているのか、現在まだ、はつきりした解釈がつかない問題であると言わざるを得ない。

以上のa～eまで、及び、本誌に掲載の竹原威滋氏の論を参考にしながら今日までの問題点をまとめると、「味噌賣橋」の昔話がは

たして日本の伝承なのか、という点に帰着する。

いつたい、いつ、誰が「味噌賣橋」を語り始めたのか、あるいは誰かが外国のものを書き換えたのか。そしてどのように広まつていったのか。——これが、今回私が追及したいテーマである。

二 飛驒の「夢と夢」

ここで『続飛驒採訪日誌』と、それに附された「丹生川昔話集」について、やや詳しく触れてみたい。

筆者（発行者）の澤田四郎作（一八九九～一九七二）は一九二六年（大正一五）年に東京帝国大学医学部卒業、同校医学部小児科教室勤務を経て、一九三二（昭和一）年に大阪市西成区に小児科医院を開業した医学博士である。柳田國男との出会いにより、執筆の分野には特に民俗学関係が多い。柳田との出会いは一九一七（昭和二）年で、「十一月二十日（月）柳田先生を砧村の書斎に訪問、民俗学を終世までつづける事を心に期す」の記録がある。以後、柳田との親交は深く、澤田は日本民俗学会に入会、後に同会理事も務めた。新聞雑誌などに「五倍子」のベンネームを使うことがあり、一九三四（昭和九）年からは民俗事項・昔話資料をまとめた小冊子『五倍子雜筆』を自刊で発行した。『五倍子雜筆第一号』から『同第二号』までは年一、二冊の発行があり、その第七号が『飛驒採訪日誌』で一九三八（昭和一三）年五月の発行、次に一九三九（昭和一四）年一月に発行したのが『続飛驒採訪日誌（五倍子雜筆第八号）』

である。

『続飛驒採訪日誌』は文庫版の一六五ページの小型の書籍である。内容は、著者の澤田が岐阜県大野郡丹生川村の松岡浅右衛門宅に滞在期間中の日誌と、調査した民俗事項の報告である第一部、および、昔話資料の第二部からなる。第二部に入るところで中扉があり、上部に「丹生川昔話集」とあり、下方には「松岡浅右衛門／松岡つぎ／松岡みか子」と三名の執筆者名が並ぶ。後書きには「丹生川昔話集」の誕生のいきさつが次のように記されている。

丹生川昔話集は、一月の旅行の折にたのんだのが動機となつて、松岡さんの人々がいろいろと農業のひまを偷んで聞いて下さつたのを報告してもらつたのを纏めたものである。このうちには話す人が高山あたりの人もあつたのが、その多くは丹生川村に住む人々が多いので假りに丹生川の名を冠しただけであつて、文体も報告してもらつたまゝにした。いづれ他日の増補をまつて整理して纏めるつもりである。

この「丹生川昔話集」には昔話七十二話が収められているが、その五十一番が「夢と夢」で、話者は「坊方の亡き母ナヨさん」である。ここにその全文を掲げる。

夢と夢

丹生川村澤上と云ふ所に、長吉といふ信心深い正直な炭焼がある。ある夜、枕元へ仙人のやうな老人があらはれて、高山町へ行つて味噌賣橋の橋の上に立つてゐる。見よ大そうよい事を聞くから

といふたかと思うと目がさめた。夢であつたから長吉はさつそく炭をうりながら高山に出て味噌買橋の上に立つてゐたが、丸一日立つてしまふたが何もよいことは聞かない。二日も三日もよいことは聞けない。五日目に味噌買橋の側の豆腐屋の主人がふしげに思つて、なぜ毎日立つてゐるのかと尋ねると、長吉は夢の話をすると、豆腐屋の主人は笑ひだして、つまらない夢なんかあてにしないさるな。私もこの間夢を見たよ。老人があらはれて、なんでも乗鞍の麓の澤上とかいふ村に、長吉と云ふ男がある。その家の側の杉の木の根を掘れ、寶物が出るよといふたが、俺は乗鞍の澤上なんて村はどこにあるか知らないし、よし知つてゐたとしてもそんなばかげた夢を信ずる気にはなれん。わるいことは言はない、お前もいゝ加減にしてお歸んなさいといふた。それを聞いた長吉は、これこそ夢の話に違ひないと身も心もおどる思ひで、お禮もそこ／＼に急いで、とぶように村へ歸つて行き、かへるなり杉の木の根を掘つてみると、出た出た、金銀のお金やいろいろの寶物がざ／＼と出たから、其おかげで長者となりて、村の人々は福とく長者といふた。（坊方の亡き母ナヨさん）

前述したが、この『続飛驒採訪日誌』の発行は一九三九（昭和一四）年一月一日であり、原稿を整えた期間は一九三八年の五月から同年十一月までの数か月である。「丹生川昔話集」の執筆者である松岡家の人々が原稿を発行者の澤田のもとに送ったのも、当然その期間であった。その中に「味噌買橋」の話があり、ロンドン橋との

類似点を柳田が指摘したのは一九三九年一月発行の『民間伝承』の誌上であった。その類似点について澤田がどう対応したかは、関西外国语大学の三原幸久氏が澤田の晩年に直接問い合わせをされたが、澤田は「味噌買橋」の問題を特に意識してはいなかつたということである。

三 翻訳・翻案・受容への道

昔話資料に現れた「味噌買橋」は四十種を越え、児童書・絵本・教科書・研究書への再録を含めると五十種を越えた。それらの資料と研究資料を読んだのち、私が立てた作業仮説は次の四種である。

(1) 巖谷小波が『グリムドイツ伝説集』の「橋の上の宝の夢」から書き換えた▲書承→翻訳→翻案▼。

(2) 巖谷小波の口演の影響を受けた童話家または教師が書き換えた▲書承→口承→書承▼。

(3) 松村武雄と水田光が“English Fairy Tales”にある「スマーファムの行商人」から書き換えた▲書承→翻訳→翻案▼。

(4) 松村武雄と水田光の著書を読んだ童話家または教師が書き換えた▲書承→口承→書承、または書承→書承→翻案▼。

このうち、(1)と(2)については、私は日本口承文芸学会(第二回研究例会(一九九一年三月十六日、中央大学))において「昔話『味噌買橋』をめぐって—その日本における翻案と受容」と題して発表をした。また、(3)と(4)については、国際説話研究会

第四十回例会（一九九〇年十月十六日、関西外国语大学）において「大正期の昔話の翻案—松村武雄・水田光を中心にして—」と題して発表をした。二度の発表の後、私は現地である高山市へ度々調査に赴いたが、現地の郷土史家、教育者、民話・民俗愛好家との出会いの中で、事実が徐々に明らかになってきた。

結果から見ると、私の立てた仮説の（3）と（4）が、まさしく的中したことになる。（1）と（2）はすでに用済みとなつた仮説であるが、多くの翻案昔話に通ずる問題なのでここに記しておきたい。

「グリム」が我国に初めて紹介されたのは一八八七（明治二〇）年の『西洋古事神仙叢話』（桐南居士）であるが、その明治二十年代から大正期の終わり頃まで、おびただしい数のグリムからの翻案昔話が出て回った。

なかでも、当時の少年雑誌の主幹として敏腕を奮つた巖谷小波は、ドイツ語が堪能であったため、次々と翻案の形でグリムを日本の少年少女のために紹介していく。

巖谷小波による「ヘンゼルとグレーテル」の翻案は、一九〇七年（明治四〇）年の『少年世界—創業一〇周年記念臨時増刊』（第三十卷第八号）に載つた。題は「鬼の宿」で、小波演となつてゐる。兄の名は太郎吉、妹はお松である。初めの部分で親たちの会話がグリムであることは何とか分かるものの、すっかり口演童話口調に成りかわっている。翌朝森へ行くとき、お松はかまどの灰を袂に入れて出て、道々撤いて行く。親が斧を高い木の枝に吊り下げる、木こり

の音が聞こえるようにしておくところは、グリムのままである。しかしお菓子の家は、鬼と鬼婆の住む「鬼の宿」である。

昔話の伝承の経路への好奇心から、このような翻案というものを仲間と調べ始めて何年か経過したが、その中から興味深い問題が二三でてきた。⁽³⁾一つはこの「ヘンゼルとグレーテル」の翻案が、口承の昔話資料から出てきたことである。

鳥取県八頭郡若桜町の話者、木田信子さん（一九〇五、明治三八年生まれ）の語りを集めた『キスカ』⁽⁴⁾に、それを見付けた。⁽⁵⁾編者は国学院大学の説話研究会のメンバーである小倉広重氏である。「子捨て山の話」として収められたものが、確かに「ヘンゼルとグレーテル」なのだが、その語り口に巖谷小波の「鬼の宿」の介在が推定できるのである。

明治から大正の当時、『少年世界』などの新年号に載る読者名簿には鳥取県の読者名も多数記載されており、記念号は毎号十数万部の発行とも書かれている。⁽⁶⁾この『キスカ』の話者、木田信子さんの場合、話者の父と兄が、話者の子どもの頃に、本で読んだ物語を語ってくれたのを、話者はよく覚えて語つたのだといふ。その語り口に数箇所の一致点があり、小波演の「鬼の宿」からの経路が顯著である。▲書承→翻訳→口承→書承』の例である。

ここに私は、大量に出回つた大衆少年雑誌、いわゆる通俗雑誌とよばれた少年少女向きの出版物の影響を、考えなければならない理由を見るのである。明治から大正、昭和の初め頃までの口承の昔話の伝播を取り上げる際に、注意しなければならぬところであろう。

「味噌賣橋」をめぐる本論考で、巖谷小波を取り上げたもう一つ

の理由は、巖谷がとりわけ早くから『ドイツ伝説集』からの翻訳を少年雑誌に載せているからである。『ドイツ伝説集』には「橋の上の宝の夢」が取り上げられ、そこで登場する橋はレーベンスブルグの橋である。グリム兄弟による「橋の上の宝の夢」の邦訳が、いつから存在するのかわからないが、口演童話家の伊東華位（一九〇一～一九九一）から見せられた古い草稿⁽⁷⁾の中に、レーベンスブルグの橋の名のある「橋の上の宝の夢」を見た。『ドイツ伝説集』から口演童話の線を探るために資料として挙げておく。

日本のみならず外国の場合でも、昔話の伝播は「口承から書承、書承から口承」という道を繰り返して今日に至ったと考えられる。私が前回の「大工と鬼六」や今回のテーマで取り上げたのは、その道のうちの一つが、当時の児童文化の見直しから見付かるのではないか、ということである。例えば「落とし子」といわれた通俗的なものも、低俗といわれて顧みられなかつた当時の児童文化も、その一つを見直して、語りの伝承の問題を考えたいと思う。

四 『世界童話大系』の刊行と翻案

神話学者であり、童話研究家である松村武雄（一八八三～一九六九）と、教育者で翻訳家・お話を研究者である水田光（一八八二～一九六四）の協働の仕事については、拙稿『大工と鬼六』の出目をめぐって⁽⁸⁾その他に詳述してあるので重複を避けるが、大正から

昭和初期におけるこの二人の児童文化活動については、まだまだ探究すべき課題が山積している。

今回のテーマで、まず注目しなければならないのは、松村武雄の編纂による『世界童話大系』である。『世界童話大系』は、一九二四（大正十三）年から一九二七（昭和二）年にかけて、全二十三巻が、近代社から刊行された。戦前の児童図書としては、大型で分厚く、体裁も内容も冊数も、ずば抜けて重厚なシリーズであった。内容の一部を紹介すると、例えば『グリム童話集』の全訳（金田鬼一訳）が初めて出たのはこのシリーズであつたし、第一巻のギリシャ・ローマに始まり、インド・トルコ、アラビアの童話（昔話）も入り、児童劇集にはシェークスピアも含め、松村の幅広い趣味と児童観の窺える編纂である。明治期の翻訳・翻案のうち、早くから日本人に親しまれたハウフの『隊商』もこのシリーズに入り、当時の読書家の児童にますます愛好された。ただし、全巻購入は高価なため、どの家庭でも備えるという訳にはいかなかつた。その分、当時の小学校の図書室では喜ばれ、全国の小学校で相当数が購入され、昭和初年から戦争の時代までと、戦争直後の本のなかつた時代の児童の読書欲を満たしたシリーズであった。児童ばかりではなく、文学好きな教師たちの高い関心を集めたのは当然だったといえよう。

水田光は、一九一九（大正八）年以後は、山崎光子の名で翻訳に携わると同時に、翻案による児童文学の執筆を続けた。山崎光子は『世界童話大系』では第一巻、第十一巻、第二十三巻の翻訳を受け持つた。その翻訳の前後、彼女の主な著作は、馬淵冷佑と共に著の

『お伽文学』(十一冊組み)と、松村と共に著で刊行した『新撰童話集』(十冊組み)の小型本のシリーズであった。それらを読むと、山崎は松村の提供による外国の昔話資料を縦横に使い、翻案と改作、

変改をしているのが分かる。いずれも、「鬼の橋（大工と鬼）」と同様の手法を用い、あるいは翻案に創作を加えた改作となっている。

その翻案がすべて成功したとは言いがたく、あるいは原典の素朴さを失い、感動を薄めた。そのシリーズの中にはジェイコブズの“English Fairy Tales”に所収の昔話の翻案が数話含まれている。

その頃の山崎光子の著作に、一九二一(大正一〇)年に春陽堂から発行した『夢の橋』と題する小品集がある。¹⁰ 話の作品中、二話が“English Fairy Tales”からの翻案である。即ち“Gobborn Seer”は「鍔の謎」となり、“The Pedlar of Swaffham”は「夢の橋」となっている。a poor pedlar は「鍛冶屋の虎吉」は、London Bridge は「姿見橋」にと移し換えられている。

前回の「大工と鬼の出目」の調査と同じく、松村武雄の『童話及児童の研究』の第九章「童話の新作改作選択の原則及び方法論」を見てみると、その第四節には「童話の材料はいかなるところに求むべきか」とあり、(a) 和漢書三十四冊、(b) 印度の書籍六冊、(c) 欧米の書籍九十七種が挙げられている。(c) の五十六番が J. Jacobs の“Celtic Fairy Tales”と “English Fairy Tales”がある。おたか山崎光子は「童話の材料は松村博士からの提供によるものであつた」と書いているので、「夢の橋」の原典は J. Jacobs の “English Fairy Tales” であることを間違いないであろう。

松村の「スマーフの商人」の初出は「夢の橋」の五年後で、それが『世界童話大系』第七巻、蘇格蘭・英蘭篇(蘇格蘭童話集・英吉利童話集)に入った。一九二六(大正一五)年である。

五 飛驒高山の人々と『世界童話大系』

岐阜県高山市の中流にかかる橋のうち、「中橋」「筏橋」「鍛冶橋」は街の中心を抜け川に架かる橋のうち、「中橋」「筏橋」「鍛冶橋」は街の中心を抜け川に架かる橋のうち、「中橋」「筏橋」「鍛冶橋」は街の中心を抜け車両の交通が多く、なかでも最も交通量の多いのが筏橋である。その筏橋が、「味噌買橋」の通称で呼ばれた橋であった。この橋のたもと、上三之町西南角に角屋藤兵衛といふ味噌・醤油屋があった。この店の向町(川の西側)の人々が味噌・醤油を買いに渡った橋といういで「味噌買橋」と呼んだという。その通称は延享年間から一九〇一(明治三十四)年の橋普請のときまで、筏橋の橋名とともに並称された。明治以後も付近の住民の橋に対する愛称として「味噌買橋」の名は使われた。この筏橋がコンクリートの現在の橋に生まれ変わったのは、一九三三(昭和八)年であった。角屋藤兵衛の味噌蔵は住宅に改造され、昭和十年代まで同じ地に残された。

昔話としての「味噌買橋」の初出は『続飛驒採訪日誌』であると前述したが、その出所は、「丹生川昔話集」の草稿である。では、松岡家の筆者と、「味噌買橋」をつなぐ線は何であるうか。今回の「味噌買橋」の調査のなかで、私は岐阜県大野郡丹生川村の松岡家をお訪ねした。

「丹生川村昔話集」の筆者として名の出ている松岡浅右衛門（一八九〇～一九六四）と、その妻である松岡つぎ（一八八八～一九六一）、つぎの妹である松岡みか子（一八九一～一九五九）の三人は、ともに昭和三十年代に亡くなってしまい、夫婦養子が跡を継いでおられた。現在の当主夫人である松岡紀子さんから、先代のご夫婦と先代夫人の妹さんのことを、いろいろ伺うことができた。

その一部を挙げると、「『丹生川村昔話集』の執筆には、松岡浅右衛門は加わらず、殆どが松岡つぎとみか子の姉妹の字で書かれてあった」とのことである。同資料の執筆者としての姉妹の日常の様子は、後に述べる隠された重大な事実に絡んでいる。「家業が農業であるにもかかわらず、その姉妹はモンペなどをはかず、いつも家でレース編みをしていたり、読んだり書いたりばかりしていた」とのことであった。特にみか子は小説のようなものも書いていたらしく。また、姉妹は度々東京へ遊びに出掛けたという。一九三八年（昭和一三）年に澤田四郎作が松岡家に滞在したときに、姉妹は澤田の民俗調査に興味を持ち始め、「あの家の話を聞きに行こう、といつては、夜になるとあちこち出掛け、聞いた話を原稿にした」と聞くことができた。尚、「坊方の亡き母ナヨさん」とは婿養子であった浅右衛門の実母であった。

一方で私は、高山市内で郷土誌関係の記録を調べた。高山市立図書館および高山市郷土資料館で、郷土史、市史、郷土学会誌を繰るなかで、郷土史家の代情山彦、教育者の畠中裕作、そしてもう一人、教育者で高山市郷土館長を務めた小林幹に注目し、また、郷土学会

誌『飛驒春秋⁽¹²⁾』に注目した。『飛驒春秋』は一九五六（昭和三）年創刊、高山市の読者を中心とした月刊の雑誌である。同誌は一九九年一月から七月まで休刊したが、同年八月から続刊している。以上のように関係文書の的を絞った矢先、一九九一年十一月十日発行の『飛驒春秋』（続刊第四号）に衝撃的に二つの記事が掲載された。

「味噌買橋」にまつわる記事の筆者は、高山市に在住の元教諭、浅野吉久氏と、やはり高山市在住の元教諭の伊藤浩子さんである。『飛驒春秋』に今回の記事を書いた二人の筆者のうち、「この町のこんな話」を書かれた浅野吉久氏は一九二六年生まれ、同市の中学校の教諭をされた方である。浅野氏は高山市立南小学校卒業だが、友人には西小学校の卒業生も多く、西校で郷土教育を熱心に行なった教師、小林幹に関心をもち、同じ教育界の先輩後輩として、知遇を求めたという。その上、浅野氏は子どもの頃、味噌買橋のすぐ東側に住んでいた。同氏の「この町のこんな話」から少し引用させていただく。

私が生まれたのが角屋藤兵^エの味噌蔵を改造した住宅であり、子供の頃からついてぞ味噌買い橋の民話にかかる話は聞いたことがなかった。長じて知ったこの話は、小林幹先生が西小学校に勤めておられた時に、児童と共に収集された飛驒の伝説の中に小糸坂の話と共に挿入されたものだとある人から聞いた。そんなことがあってから、小林幹先生に一度尋ねた所、「うん、まあ、そういうこと…」ということで、ロンドン橋の話の翻案であるこ

とも確かめられた。

浅野氏の文章に続き、『飛驒春秋』の同号に掲載された文章は「味噌買橋」の話はイギリスから?と題したもので、筆者は高山市花里町に在住の、元高山市立西小学校教諭の伊藤浩子さんである。

「味噌買橋」の話に疑問を持った伊藤さんは、『続飛驒採訪日誌』にある「小糸坂の話」と、一九三三(昭和八)年に高山町立西小学校から出された『郷土口碑伝説集』の「小糸坂」の類似から、同校教諭であった小林幹の存在に気付く。

「小林幹先生がロンドン橋の話を移植されたのではないか」と推測した伊藤さんに対して、「味噌買橋の話は、小林幹さんが西校で出した郷土教育に関する研究物の一つとして書かれたものが世に広まりました」との証言を寄せているのは、高山市の教育長を務めた、畠中裕作である。やがて伊藤さんは、一九三三(昭和八)年頃、高

(3) と (4) に挙げておいたことだったので、早速、筆者に連絡を取り、一九九一年十一月末に私としては三度目の高山訪問を行い、元教師の方々や小林幹の長男ご夫妻にお会いした。

小林幹(一九〇三~一九八八)は、一九一四(大正二)年から一九四五(昭和二〇)年まで高山西小学校に奉職した。一九五七(昭和三二)年、高山市郷土館長に就任、郷土史研究の第一人者として活躍した。多くの教え子たちは、口を揃えて「小林先生は覇氣のある、ユニークな教師だった」という。小林の書いた問題の「味噌買橋」が収まつた贋写版刷りの冊子はまだ発見されていないが、小林の元同僚、教え子、小林幹の長男の小林岳彦氏などが「確かに見た記憶がある」といわれた。今後は、高山市内の教育関係者と西小学校の卒業生に範囲を絞ることができるので、その冊子の発見の可能性もあるのではないだろうか。

前述の郷土史家代情山彦は、一九六一(昭和三六)年に小林に「味噌買橋の翻案」について確かめていることがわかつた。^[13]

また、一九七八(昭和五三)年に出版された小林幹著『洋杖と袴』には、小糸坂の伝説は小林が創作した話だと書かれているとのことである。その「小糸坂」が『続飛驒採訪日誌』に掲載されているので、伊藤さんは、「一九三三(昭和八)年に高山市立西小学校から出された『郷土口碑伝説集』や、その他の小林の著作物が、松岡家の執筆者の手に渡っていた」との推測をしている。『郷土口碑伝説集』と『続飛驒採訪日誌』との関係は、まもなく伊藤浩子さんの手で明らかになる筈である。

『飛驒春秋』の二つの記事の内容は、私が立てた四種の仮説の

『飛驒春秋』の二つの記事をまとめるに、「味噌賣橋」の話は、西小学校の教師をしていた小林幹が、昭和八年頃に、『世界童話大系』に所収の『スマーフ・アムの行商人』をもとに書き換えたものである。小林幹の書いた『味噌賣橋』は、西小学校の郷土教育の活動の中で作られた贋写版刷りの冊子に入っていた」と断定してもよいであろう。

六 教育活動と伝承の記録

明治時代から昭和にかけて、多くの口碑の記録集が学校教育の場で作成されている。その一部分は刊行や保存が行われているが、大部分は時がたてば、忘れられ、失われてしまう記録集である。昔話研究においては、研究者と現場の教師との連絡が、過去に殆どなかつたために、研究の資料に入った記録集はわずかである。しかしそのわずかなものを手掛かりにして、過去の教師たちの「児童・生徒と文化をつなぐ教育活動」への情熱を感じさせられる。

そのことは、埋もれた校務日誌などからでも、もう少し分かるのではないかと考える。特に各地の小学校では様々な教育活動のうちの「童話」の活動を、明らかにする必要がある。口演童話、実演童話、教室童話などの、明治から昭和にかけての集成がほしいと思う。口演童話が各地の児童・生徒の語りにどの程度入り込んでいたかは、明確にはつかみきれないが、人気のあった雑誌や一般によく出回った口演童話の系統の書籍からは、ある程度の影響を受けた。

『飛驒春秋』の二つの記事をまとめるに、「味噌賣橋」の話は、

當時山西小学校の教師をしていた小林幹が、昭和八年頃に、『世界童話大系』に所収の『スマーフ・アムの行商人』をもとに書き換えたものである。小林幹の書いた『味噌賣橋』は、西小学校の郷土教育の活動の中で作られた贋写版刷りの冊子に入っていた」と断定してもよいであろう。

と思われる。前記の雑誌・書籍からの影響は十分考慮したい。

ここで、大正と昭和初期の、女学生の採集による昔話資料に触れておきたい。

一九八八年に民話と文学の会から刊行された『福島高女民話集』は、一九一九年（大正八）年に福島高等女学校の生徒が記録したお伽噺集である。関敬吉のもとに預けられていたという二冊のノートが、記録されてから七十年後に出版されたものである。タイトルは「印象の深かったおはなし」となっているが、内容は昔話を中心である。

女学生が書いたその七十二話の話の中に、グリムからのものを五話、ジエイコブズからのもの一話、ギリシャのもの一話をみつけることができる。⁽¹⁴⁾記録されたそれらの翻案は、どれもまったく日本の風土に溶け込みつつある形で、これも△書承→翻案→□承の例である。このような例が、その時期の資料には起こりがちなのではないだろうか。

今回作成した「味噌賣橋」の比較表（八〇～八三ページ）のうち、女学生の記録である『西讃岐昔話集』と『磐城昔話集』にも、そのことが当てはまらないだろうか、との疑問をここで提出しておく。

次に、学校教科書と昔話の問題を考えみたい。

教科書に掲載された昔話は、その話の伝播や伝承にどのような影響を与えるであろうか。それを考慮するための資料として、「味噌賣橋」の載ったもののうち、柳田國男編による教科書を二種、

『新編 新しい国語 中学一年』(東京書籍、一九六六)

そして、木下順二監修のものとして、

『改訂 中学国語I』(教育出版、一九八三)

以上の三種をここに挙げ、「味噌買橋」の比較表に加える。

後出の「味噌買橋の年代順の比較表」の最後に加えた28番は、教科書と昔話の問題の一考とするためのものである。ここで、「書承からの書承」、すなわち口承の記録と再話の間で、いま頻発しつつある問題について考えたいと思う。⁽¹⁵⁾

28番に挙げた『日南町の昔ばなし』は一九九一年八月に刊行されたものである。最近になって私に送られてきたものであるが、編者の了解が得られたので、その問題を報告することにする。

内容は一九六九(昭和四四)年に、岡山県岡山市のノートルダム清心女子大学の学生二十六人が、鳥取県日野郡の日南町に民話採訪に出掛け、そこで同町のお年寄りから聞いた百十三話の話が収められている。採訪の直後にガリ版刷りの資料集が出されたが、二十年経つてから、同町出身で京都市に住む三上茂文氏が、大型のハードカバーの美装本として改訂編集し、再発行したものである。

三上氏は、この本の刊行のことばのなかに、出身地である日南町の自然・歴史・民俗について十分な解説をつけたので、ふるさとの昔話に対する暖かい思いが伝わる。多くの文献を参考にして、一話毎に丁寧な解説もついている。読み進むうちに、私は鳥取のことばの「夢の橋」を見付けたので、おや、と思った。解説には『日本昔話百選』の引用がある。私が早速電話をして、「この話者に『いつ、

誰からこれを聞いたか』尋ねてほしい」と頼んだところ、これは語りを聞いたのではなく、自分がふとしたことから一九九〇年度の教育出版の教科書に出ていた「みそ買い橋」を読み、そのような話を郷里でも聞いたような気がして、『日本昔話百選』を参考にしながらふるさとのことばで再話したものだと答だった。そうしてみると、この本の編者は十年前の記録集から、十三話を外し、新たに自分の気にいった話を十三話付け加えていることも分かつてきだ。

これに類することを、他の本の場合でも、語られた話の場合でもよく見かける。土地の語りと思って聞いた話が、実はつい最近、話者が読んだばかりの話だということも多い。採訪に行き、そこで語って下さった話者にあとから尋ねたところ、「本を読んで気になった話を土地のことばで語った」といわれることは、何回も経験している。しかしそこに、書く人の、あるいは語る人の「書き換えたい」「つくり替えたい」という気持ちが強く働いているのを感じるのである。それを裏返せば、自分がその話に強く魅かれた感動の表現なのだろうか、とも思う。そして、学校教育と、量産される教科書の問題にも気付かされたのが、この日南町の「味噌買橋」だつた。

七 結 論

昔話としての「味噌買橋」は、「書承→口承→書承→口承→書承」と繰り返されて今日に至った話である。それが日本においては「翻

訳と翻案により受容された」との結論になる。

「ここまでを要約すると次のようになる。

「橋の上の宝の夢」はグリム兄弟による『ドイツ伝説集』で広まつた。「スマーファムの行商人」はジェイコブズの『English Fairy Tales』で広まつた。松村武雄はジェイコブズの『スマーファムの行商人』を、おそらく一九二〇年頃に翻訳していた。その翻訳から、水田光が「夢の橋」を翻案した。そのあと『世界童話大系』の刊行が始まり、第七巻に松村の訳による「スマーファムの行商人」が入つた。

大正時代の児童書としては大著であった『世界童話大系』のシリーズは、日本全国の児童の教育に関心のあつた人々の手に渡つていつた。その一冊が、岐阜県高山市の教員であった小林幹の手にもあり、小林は教育活動の一いつとして、翻案の「味噌買橋」を執筆した。その「味噌買橋」を収録した冊子は勤務校である高山西小学校から発行され、それは同校から発行の『郷土口碑伝説集』とともに、岐阜県大野郡丹生川村の松岡浅右衛門・つぎ・みか子のもとに渡つた。つぎとみか子の姉妹は、文学や文芸を好む文化的志向の強い女性であった。

その松岡家に度々逗留したのが、澤田四郎作であった。澤田の民俗調査に刺激を受けた姉妹は、付近の村人から昔話・伝説を聞き取り、原稿にして澤田に託した。それが「丹生川昔話集」であるが、その草稿には、高山の小学校から発行された冊子からの書き換えた文章も含まれていた。澤田は自刊の「五倍子雑筆」に「丹生川昔話

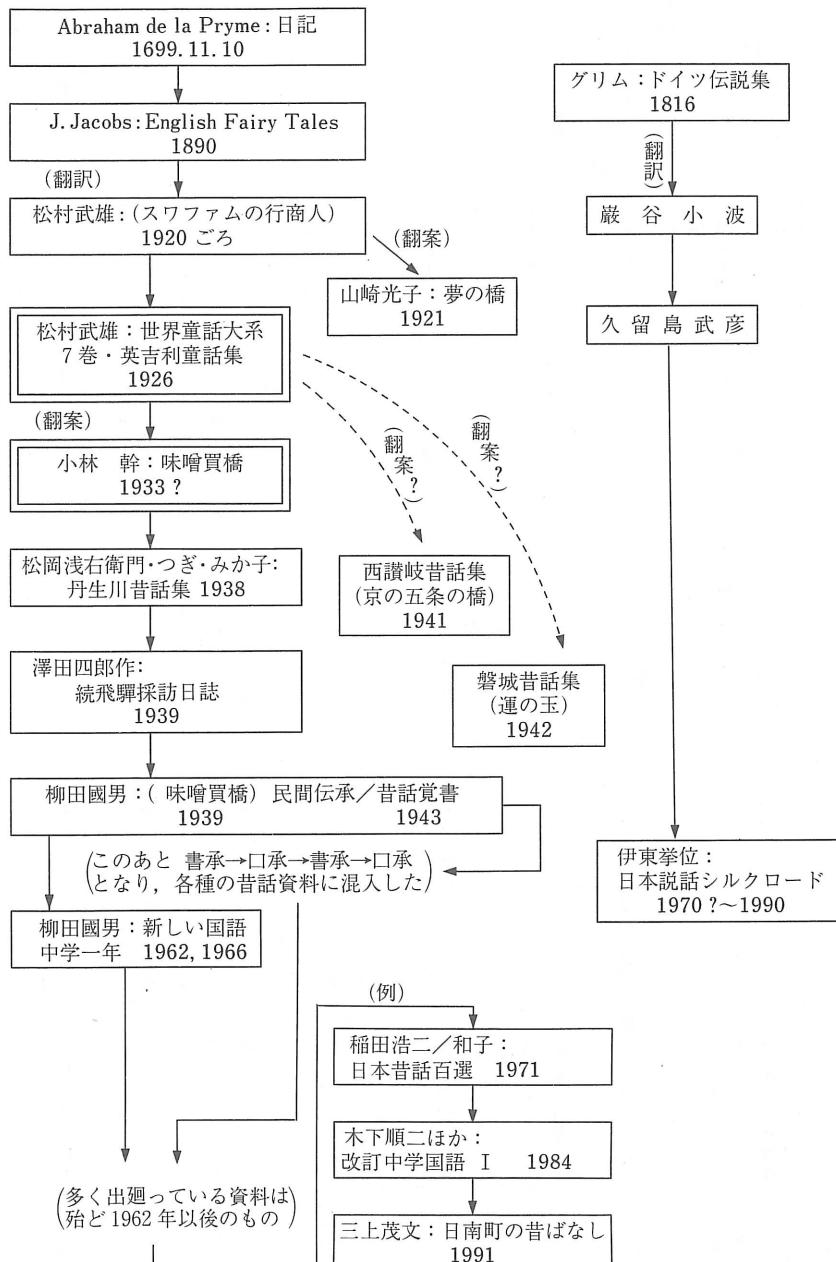
集」を加え、『続飛驒採訪日誌』として発行し、柳田國男に呈上した。柳田はすぐに『民間伝承』に取り上げ、それはのちに『昔話観書』に編入された。

日本における「味噌買橋」の受容の経路を図で示すと次ページのようになる。

柳田が「味噌買橋」に言及して論じたのが一九三九（昭和一四）年である。初めに引用した通り、柳田は「どこかに隠れてもとの種子はあつたのである。いまに出處もわかつて来ようも知れぬ」と書いている。柳田がそれを書いてから五十二年が経過したが、ここで松村武雄と小林幹の接点が判明し、「スマーファムの行商人」の翻訳と「味噌買橋」の翻案の二つの書承が明らかになったところで、応の決着とみてよい。

しかし、この「味噌買橋」の話は、人々に愛好されてきた昔話であることを忘れる訳にはいかない。「味噌買橋」は他所の土地の話であつても自分の所の話として自慢したい、魅力のある話だといえよう。世界各地の人々が橋に夢を託したこと、そして日本では「味噌買橋」のネーミングが人に愛されて語られ、また書かれたことが大きい。柳田が取り上げたのがこの「味噌買橋」の流布に大きな影響を齎したかも知れないが、それとは無関係に、「宝は我が家に」というテーマも人々に愛され、「これを語りたい」「語られないかたけれども書きたい」という伝承の願望が大きかったということであろう。そのような気持ちを起こさせるものが、この話にあったといえるのではないだろうか。

日本における「味噌買橋」の受容の経路



味噌賣橋（AT一六四五）の年代順比較表

（作成・櫻井美紀。一九九一）

7	丹生川昔話集 (草稿)	松岡 浅右衛門 みか子	小林 幹	松村武雄	山崎光子	一九一 (大10)	一八九〇	一八九〇	橋の夢 の夢 の夢	橋の上の宝 の夢 の夢	レーベンス ブルク附近	話名	地名
6	高山町立西小学校郷 土教育研究会の冊子 (謄写版刷り)	一九三二 (昭13)	一九三三 (昭8)?	スワファム の行商人	夢の橋	一九一 (大15)	ノーフォー クのスワフ アム	ノーフォー クのスワフ アム	スワファム の行商人	橋の上の宝 の夢 の夢	レーベンス ブルク附近	主人公	援助者 (1) (2)
5	英吉利童話集 (世界童話大系七、 蘇格蘭・英蘭編)	一九一六	スワファム の行商人	夢の橋	清水村	一九一 (大10)	ノーフォー クのスワフ アム	ノーフォー クのスワフ アム	ノーフォー クのスワフ アム	橋の上の宝 の夢 の夢	レーベンス ブルク附近	橋の名	橋の名
4	夢の橋	一九一 (大10)	行商人	虎吉 (鍛冶屋)	行商人	一九一 (大10)	声 店の主人	声 店の主人	声 店の主人	橋の上の宝 の夢 の夢	レーベンス ブルク附近	待つ日数／埋葬場所／宝／備考	待つ日数／埋葬場所／宝／備考
3	English Fairy Tales	J. Jacobs	一八九〇	行商人	行商人	一八九〇	小僧 (パン屋)	小僧 (パン屋)	小僧 (パン屋)	橋の上の宝 の夢 の夢	レーベンス ブルク附近	一週間／指さしながら、あの木 の下／金／ドイツ	一週間／指さしながら、あの木 の下／金／ドイツ
2	(同右)	(同右)	(同右)	(同右)	(同右)	(同右)	(同右)	(同右)	(同右)	(同右)	(同右)	(同右)	(同右)
1	Deutsche Sagen	Brüder Grimm	一八一六	橋の上の宝	橋の上の宝	橋の上の宝	橋の上の宝	橋の上の宝	橋の上の宝	橋の上の宝	橋の上の宝	橋の上の宝	橋の上の宝

五日／屋敷裏の杉の根／金銀の
お金やいろいろの宝物／書承
(6番から)と推定

15	14	13	12	11	10	9	8
(2) 安芸・備後の民話	日本民話選	日本昔話名彙	磐城昔話集	(同右)	西讃岐昔話集	民間伝承	続飛騨採訪日誌
垣内 稔	木下順一	柳田國男 (監修)	岩崎敏夫	(同右)	武田 明	柳田國男	澤田四郎作
(昭34) 一九五九	(昭33) 一九五八	(昭23) 一九四八	(昭17) 一九四一	(同右)	(昭16) 一九四一	(昭14) 一九三九	(昭14) 一九三九
夢見長者	みそ買い橋	味噌買橋	運の玉	橋(口) 京の五条の	橋(イ) 京の五条の	味噌買橋	夢と夢
あるところ	沢上	郡の沢上 のりくら岳 のふもとの	飛騨の丹生	片田舎 出羽の国の		上 丹生川の沢	上 丹生川村沢
(木こり) 三吉	長吉 (炭やき)	長吉 (炭焼)	(百姓)	桃助 (百姓)	茂作 (百姓)	長吉 (炭焼き)	長吉 (炭焼き)
(2) お坊さん ん	(1) 仙人のよう なおじいさ	(2) (1) だれやら とうふ屋	(2) (1) 夢 豆腐屋	(2) (1) 観音様 商人	(2) (1) 男 白髪の老人	(2) (1) 男 夢	(2) (1) 仙人のやう な老人 豆腐屋
麓の一本橋 だんご山の 一本橋	みそ買い橋	味噌買橋	橋 江戸の日本	隣村との境 の橋	橋 京の五条の	味噌買橋	味噌買橋
郡	五日/だんだら森の一本杉の木 の根本/大判小判 徳島県美馬	から	長吉の屋敷の杉の下/金銀/書承 (8番から)	三日/出羽の国の中橋村の桃の 木林/黄金/福島県石城郡	一日/茂作の家の庭の樺の木/ 本/黄金/香川県丸龜市	五日/長吉の家の左の木の根/ 金銀/香川県丸龜市	いつまでも/長吉の屋敷の杉の 樹の下/金銀/書承 (8番か ら)

22	21	20	19	18	17	16	
中国山地の昔話	日本昔話百選	一宇村の昔話	美濃と飛驒のむかし話	雪国の夜語り	新編新しい国語 中学一年	新しい国語 中学一年	資料名
稻田浩一 立石憲利	和子 稻田浩一	岡山県立女 子短大	岐阜県小中 学校校長会	水沢謙一	(同右)	柳田國男	著者名
(昭49) 一九七四	(昭46) 一九七一	(昭46) 一九七一	(昭45) 一九七〇	(昭43) 一九六八	(昭41) 一九六六	(昭37) 一九六二	発行年
夢の橋	味噌買橋	味噌買橋	味噌買い橋	橋の夢	(同右)	味噌買橋	話名
あるところ	沢上	沢上村	上丹生川の沢	あるどこ	(同右)	丹生川村の長吉 (炭焼き)	地名
若あもん (炭焼き)	長吉 (炭焼き)	長浜衛 (炭焼き)	長吉 (炭焼き)	炭焼き	(同右)	人(1)仙人のよう (2)な老人 豆腐屋の主	主人公
(2)(1)夢 豆腐屋	(2)(1)な年寄 豆腐屋	(2)(1)夢 豆腐屋	(1)な白いひげ のじいさま とうふ屋	(1)白いひげ のじいさま とうふ屋	(2)(1)神様 トウフヤ	(同右)	援助者(1)(2)
橋	味噌買橋	買橋	上町の味噌	味噌買橋	大きな川の橋	味噌買橋	橋の名
阿哲郡	四日／松／一分・小判／岡山県	五日／金銀／書承(8番から)	五日／長浜衛の家の庭の松の木の根 本／大判小判／徳島県美馬郡	五日／炭焼きの庭の杉の木の根 子／小判／書承(6番から)	根っこ／金／新潟県長岡市	五日／杉の木の根／金銀のお金 や宝物／書承(8番から)	待つ日数／埋蔵場所／宝／備考

28	27	26	25	24	23
日南町の昔ばなし (同右)	日本説話シルクロード (草稿)	改訂・中学国語I	ばばさのトントンム カシ	みちのくの海山の昔	
三上茂文 (平3)	伊東華位 伊東華位	木下順一ほ (監修)	水沢謙一 (昭59)	佐々木徳夫 (昭51)	佐々木徳夫 (昭50)
夢の橋 阿毘縁	味噌賣橋 ある村	みそ買い橋 ある所	橋の夢 沢上 (長吉)	橋の夢 ある山の村 (あんにや しぶ売り)	あっこ 炭焼き (2)(1) 神さん
(やまこ) (2)(1) 豆腐屋	多吉 (2)(1) とうふ屋	男 (2)(1) 男	(炭焼き) (1)仙人のよう な年寄 豆腐屋 (2)(1) 白髪のばば	大大きな川の 橋 おっきな川 (2)(1) 神様 (2)(1) 白髪のばば	三日／炭焼きの家の南天の木の 下／金／宮城県多賀城市 下／大判小判／新潟県北浦原郡
生山橋 五日／藤助の家の樁の根元／大 判小判／書承 (21・25番から)	味噌賣橋 一週間／多吉の家の側の樁の下 金／書承と推定	レー・ゲンス ブルクの橋 この木の下／金／書承 (1番から)	幾日か／(指さしながら)あそ この木の下／金／書承 (21番から)	三日／ある山の村の橋の木の 下／長吉の家のそばのまつの 根方／金銀や宝物／書承 (21番 から)	三日／ある山の村の橋の木の 下／金／宮城県多賀城市 下／大判小判／新潟県北浦原郡

* この「味噌賣橋の年代順比較表」では、昔話資料ばかりではなく、文献からの再話も含めた。また、一九六〇年以後は急激に資料数が増えているので、後世の研究に影響を与えたと思われるものを選んで構成した。

〔注〕

- (1) 大林太良「民話における夢」、『夢と人間』(木村尚三郎編、東京大学出版会、一九八六)に所収。
- (2) 大島広志「明治期のグリム翻訳・翻案年表」(『語りの世界・十四号』語り手たちの会、一九九一に所収)に詳述がある。
- (3) 語り手たちの会の講座・研究サークルなどで一九八四年から翻案昔話の問題を取り上げた。
- (4) 本田信子・著『キスカ—こころのたまご—』(小倉広重・編『キスカ』、一九八四)
- (5) 杉浦邦子『グリムの昔話から・2』によせて』(『グリムの昔話から・2』語り手たちの会、一九九一に所収)による。
- (6) 木村小舟「明治少年文学史(博文館事業発達史)」(『少年世界・第十三卷第八号』に所収)による。
- (7) 伊藤學位「日本説話シルクロード」の草稿は、二〇〇字詰で約六〇〇枚あり、長年にわたって執筆したこと。その中に「味噌買橋式」と「味噌買橋」の二話の粗筋と解説があつた。草稿の表には、「話材は久留島武彦と山北清治から」と記されていた。
- (8) 抽稿「大工と鬼六」の出自をめぐって』(『口承文藝研究・第十一号』(日本口承文藝研究会、一九八八)に所収)。
- (9) 抽稿「大工と鬼六」の周辺』、『民話の手帖・第三十三号』
- (10) 鈴木三重吉の『湖水の女』『黄金鳥』などに続き、ほぼ同一型で春陽堂から出版された。久米修二(装画)。
- (11) 松村武雄『童話及児童の研究』(培風館、一九一三)。
- (12) 郷土学会誌『飛騨春秋』発行所は高山市民時報社、月刊。
- (13) 『岐阜タイムス』の一九六一(昭和三六)年三月十八日の紙上に、高山市代情山彦と小林幹の対談が掲載された。その対談中に、代情は「味噌買橋」の話を創作したかを問い、それに小林は肯定とされる返事をしている。
- (14) 大島広志「福島高女民話集」解説(『民話と文学の会編、ふるさと企画』一九八八)。
- (15) 『日南町の昔ばなし』(三上茂文編、三上国武発行、一九九一)。
- (さくらい・みき／語り手たちの会)